

# 木村家の 人びと

The Kimura Family

Tani Toshiko

谷俊彦

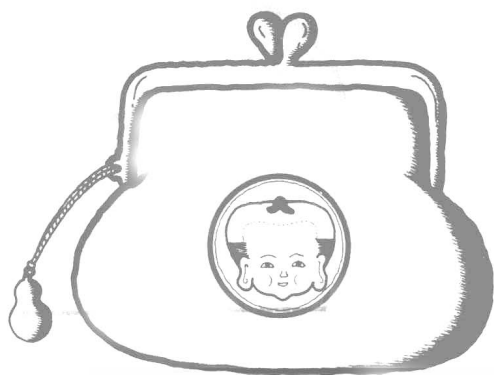


The Kimura Family

# 木村家の 人びと

Tani Toshiko

谷俊彦



## 著者略歴

1956年9月名古屋生まれ。東京大学工学部卒業後、同大学院研究科修了。84年「人間と化学」で第三回毎日二十一世紀賞、86年「木村家の人びと」で第四回小説新潮新人賞、93年「二十一世紀の共生主義」で第六回2001年への提言最優秀論文賞、各受賞。

## きむらけ　ひと 木村家の人びと

1995年3月20日発行

- 【著者】 谷俊彦  
【発行者】 佐藤亮一  
【発行所】 株式会社新潮社

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71 振替東京 4-808

【電話】 営業部03-3266-5111 編集部03-3266-5411

- 【印刷所】 大日本印刷株式会社  
【製本所】 大口製本印刷株式会社

© Toshihiko Tani 1995, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-403701-X C0093

価格はカバーに表示してあります。

## 目次

木村家の人びと

5

駱駝市役所の人びと

67

東京都大学の人びと

169

【装画】 土橋とし子  
【装幀】 新潮社装幀室

# 木村家の人びと



# 木村家の人びと





## 一 起床

トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルル、カチャ。

「ふあい、カワ……シマ……ですう……」

受話器の向こうから眠そうな声が聞こえてくる。

「川島さんですか。お早うございます。木村です。今日も一日、お仕事頑張ってください」

明るく告げると、木村肇は電話を切った。これで彼の六時の分は終わりだ。続いて妻の典子がダイヤルを回す。

肇はバジャマを脱ぎ、着替え始めた。廊下からは電話中の妻の声が聞こえる。

「ス、ス、ム、さあん。起きた？ あん……、お寝坊さんね。……」

我が妻ながら、その甘い声の響きはぞっとするほど煽情的だ。肇に対して、あんな艶っぽい言葉がもたれかかって来ることは決してない。もちろん、あの甘ったるい声は営業用の物だからだ。

顧客のひとり、独身の商社マンである藤谷進とは、妻の典子がモーニングコールを行う契約を結んでいた。これだと、代金は肇が電話する場合の倍額、月一万円である。

背広に着替えた肇が新聞配達店へ出かけようとすると、急に典子の声が乱れ、

「あん……だめよん……主人がいるのよ……ああ……ああ……だめ……あん……いい……いいわ……続けて……そう……」

途切れ途切れになってきた。

そういうえば、藤谷は月から契約をモーニングテレフォンセックスに切り替えていたのだった。「そうなりますと、料金は月一万八千円になりますが、よろしいですか？」

と尋ねる肇に、

「ああ。実は恋人と別れちゃってね。毎朝電話してもらって一万八千円なら安いよ。ソープランド一回分にもならない」

と答えた、藤谷の期待に満ちた声を思い出した。

外に出ると季節は三月、まだ早朝の空気は冷たい。

典子の奴も本気で感じてみたいいな声の具合だったな。うまくなったもんだ。もっとも、次の客が待つてるし、お袋の朝メシと弁当作りを手伝わなきゃならないから、契約通り五分きっかりで切り上げるはずだ。典子もあれで徹底してるからな。

そんなことを思いながら、彼はアスファルトの道を歩いた。牛乳屋の軽トラックが瓶をカチャカチャ鳴らしながら傍らを走り過ぎる。

モーニングコール業を始めたのは十年前、妻と結婚して間もない頃だった。最初は、深酒のた

めに連日遅刻する社内の独身男に頼まれたのがきっかけだった。毎朝定時に電話機のベルが鳴る彼のモーニングコールは評判が良く、間もなく客は二十数人に増えた。

肇一人ではさばききれなくなつて、七十になる母親の八重と近所の老人たちに仕事を割り当て、契約金の三割を渡すことにしたが、この時は客の多くに逃げられ、苦い思いをした。彼は、老人が早起きでしかも退屈しきつており会話を飢えている、という特性を利用したつもりだったが、モーニングコールの際に延々と始まる昔話は顧客に嫌われた。また、老人のうち何人かは、いわゆる「ボケ老人」に近かつたため、番号のかけ違いや時間の間違いをしばしば引き起こし、肇の信用を失墜させた。

モーニングコール業を老人たちの手から取り戻してからは客も少しずつ戻つて来たし、特にその一部を妻に任せてからはむしろ以前より顧客は増えた。注文が妻に殺到したため、女声モーニングコール部門を切り離して契約金を倍額にしたが、それでも契約数は伸びた。週刊誌で眼にしたテレフォンセックスを組み合わせてからはさらに売り上げは増した。今では、肇自身が行う目覚し電話よりも、料金はその四倍近いモーニングテレフォンセックスの方が数が多く、典子一人ではさばききれなくなり、近所の主婦五人を下請けに使っている。主婦たちはさすがに金銭感覚が鋭く、老人たちのようには安く使えない。肇夫婦は契約金の二割をピンハネするだけである。朝は主婦にとって最も忙しい時間帯であるから、テレフォンセックスはモーニングコールから独立させ、夜の部に移さざるを得ないかもしれない、と近頃肇は考えている。

今後この部門で売り上げを伸ばしていくにはどうしたら良いだろうか。思索しているうちに販売店に着いた。

折り込み広告が挟まれた、山のような朝刊の束を店の自転車に積む。さあ、これからこの新聞を配達するわけだが、もちろん霧もやの中を息弾ませながら一軒一軒回る、という非能率的な事は彼はしない。

「それにしても、新聞ってのは重いもんだな。特に、このぎっしり入った折り込み広告が余計だ。新聞の紙面だって広告だらけだ。新聞社も広告収入の方が多いくらいだそうだからな。客は金出して広告買ってるようなもんだ」

その時、彼の頭に名案が浮かんだ。モーニングコールの中にもコマースヤルを入れるべきだ！

「お早うございます。木村です。今日も一日、……」  
の代わりに、

「お早うございます。藤町駅前の民謡酒場『北の国』でございます。今日も一日、お勤め御苦労様です。お仕事の疲れは『北の国』で一杯と一曲で忘れて下さい」

と言えばいい。

或いは、

「ねえ、ねえ、起きたん？ 今日もお仕事がんばってね。会社の帰りには『ピンクキャッツ』本町店に寄ってね。きつとよ。たあっぷり、サービスするわ。ウフン」

なんて典子に言わせてもいい。毎朝毎朝こうして電話で誘えば、客の潜在意識には店の名前が植え付けられ、会社帰りに足が店の方を向くこともあるはずだ。

広告料はいくらにしようかと考えていると、後ろから声をかけられた。

「木村さん、木村さん、どこへ行きなさる？」

そのしゃがれ声はおヨネ婆さんだ。肇はあわてて自転車を停めた。

「ああ、おヨネさん。いや、考えごとしてたもんで、うっかり通り過ぎるところだった」

おヨネ婆さんはよく合わない入れ歯を気にしながら言った。

「いやだよ、そんなこっちゃ困るわ。あたしや、これを何より楽しみにしてるんじやから」

「ごめん、ごめん。じゃ、お婆ちゃん、一丁目の分、三十部置いていくからね。よろしく頼むよ」

「あいよ。それから、これは今朝の分のキンピラじやから」

肇は新聞と引きかえに婆さんからプラスチック容器を受け取った。

「ありがとう、明日も頼むよ」

次は二丁目だ。

彼は、モーニングコールの仕事を取り上げられた老人たちが不平を漏らすのを聞いて、他に何かいい仕事はないかと考え、その末に、この新聞配達を思いついたのだ。

老人たちは、

①早起きである。

②適度の運動を欲している。

という、実に新聞配達向きの資質を備えていた。それなのに、どうして老人の新聞配達がいなかったのだろうか？

それは、

①短時間に広い行動半径が持てない。

②、いつポツクリ逝くかわからない、たいへん危うい存在である。

という致命的な欠点をも合わせ持っていたからである。ここに肇の新商売が成立する背景があった。

二丁目の担当である煙草屋のおトキ婆さんも、店の前でうれしそうに彼を待っていた。おヨネさん同様、家では邪魔者扱いされ、煙草売りの仕事も自動販売機に奪われてしまったおトキ婆さんにとって、この「仕事」は生き甲斐にすらなっている。

「じゃあ、お婆ちゃん、頼んだよ。一度にたくさん持って転ばないようにね」

「大丈夫よう。わしゃあ、孫が前に使った乳母車に新聞のせて行くのんよ」

「そりゃあいい考えだね」

肇はおトキ婆さんから、サトイモの煮ところがしの入った容器を受け取った。おトキさんは足腰も丈夫そうだから、あと五年は使えるな、と彼は考えた。

肇は販売店から受け取った新聞を、こうして二十部から三十部ぐらいずつ、契約している老人の家に置いて行く。そして老人が自分の町内に配って回るのである。販売店が支払う金の取り分は、肇が七割、老人たちが三割で、この三割は配達部数に応じて分配される。退屈している老人たちのことだ、只でも喜んで働くだろうが、やはりこの程度の小遣いを渡しておく方が無難だ。夕刊を老人たちに届けるのは、妻の典子の仕事である。

ところで、彼が婆さんたちから受け取るキンピラごぼうや芋の煮ところがし——あれは一体何だろうか？

三丁目の当番である源爺さんの家に来た。しかし、どうしたことか、いつも玄関の前でぎこち

ない体操をしている爺さんの姿が見えない。呼び鈴を押すと、異常に肥満した、二重顎の四十女が出て来た。

「ああら、木村さん。御免なさい。うちのお爺ちゃん、きのうお風呂で倒れて寝込んでしまったのよ」

この「ああら」は源爺さんの長男の嫁だ。そう言えば爺さん、昨日の朝、血圧が高いと言っていたわけ。

「しょうがねえな。配達できねえじゃねえか。じゃあ、責任とって、デブ、お前が配れよ。少しは瘦せるぜ」

と言いたいところだが、近所づきあいは大切、肇は心配そうな顔で、

「そりゃあいけませんねえ。どうかお大事にして下さい。いいえ、大丈夫です。三丁目は私が配りますから」

と言って頭を下げ、四丁目に向かった。

三丁目では、今度はもっと元気な老人を見つけなくてはならない。肇はあの町内の老人の顔をあれこれ思い浮かべた。

こうして下請けのもとに新聞の束を持って回るだけでもたいへんな労力である。なんとかこれさえも他人に任せる方法はないものだろうか。こう考えながら自転車をこいでいた彼の頭に、八百屋の米吉爺さんの顔が浮かんだ。そうだ、米吉爺さんが使える！ 二丁目の米吉爺さんは家業を息子夫婦に譲り、愛用の軽トラック一台を足代わりに使う、楽隠居の身分だ。米吉爺さんに代わってもらおう。爺さんの取り分は……そうだな、二割程度が相場だろう。



肇はこの考えに有頂天になった。これで居ながらにして新聞配達ができる。軽トラクなら行動半径も広いし荷台の容量も大きいから、現在の倍、千部程度は楽にさばけるだろう。それに、米吉爺さんのことだ、老人の知り合いも多いだろうから、さらに事業を拡大して、この松ヶ丘学区から他の新聞配達を全て駆逐するくらい成長させることも夢ではないかもしれない。あとは、米吉爺さんが一人立ちしないように、何か弱みを握っておくだけだ。

契約している老人たちのもとに新聞を届け終わった後、また引き返して来て三丁目の各戸に配達したため、肇が家に戻ったのはもう七時近かった。

「どうしたの、遅かったじゃない」

「ああ、三丁目を自分で配ったもんだから」

「早く早く、もう御弁当の御飯は詰め終わって、御惣菜の到着を待っていたのよ」

肇は老人たちから集めた七個のプラスチック容器を典子に渡した。

「お袋は？」

「もう朝御飯の出前に出かけたわよ。それより、あなた、七時のモーニングコールにかからなきゃ」

「おう、そうだそうだ」

肇はまた電話機に向かった。典子は十六個の弁当箱に七種類のおかずを詰めている。そして肇の母・八重は隣のアパートに朝食を運んでいた。

木村家では毎朝米を二升炊く。もちろん、肇夫婦と小学校三年の娘・照美、母の八重の四人家族では、こんなに多量の飯は必要ない。この飯のほとんどは商売物なのだ。